

# 尾崎翠と少女小説

——描かれた題材・小道具とテーマの変遷——

鈴木 ちよ

## 一 はじめに

日本有数の女性幻想作家として知られる尾崎翠は、雑誌『少女世界』

に大正六年七月～大正八年六月と、大正十一年三月～昭和四年五月の二つの期間にまたがって少女小説を掲載していた。これら一九九八年に筑摩書房から『定本 尾崎翠全集<sup>1)</sup>』として刊行される形で明らかになった未発表原稿は、詩一篇を含め全部で三十三篇<sup>2)</sup>もの分量を持っていた。そしてその執筆期間が翠の作家人生の中では長期に渡っており、尚且つ最後の少女小説『哀しき桜草』を書いた僅か二年後に代表作長編『第七官界彷徨<sup>3)</sup>』を発表している事を考慮すると、これら一連の少女小説を細かく分析してみる事は非常に重要な意味を持つと考えられる。

そこで今回はこれら一連の少女小説に登場する沢山の題材・小道具と描かれたテーマを分析し、その変遷と後の作品への影響などを検証して行きたい。

次ページから、翠の少女作品全三十三篇を、「題名」、「登場人物」、「登場する題材・小道具」、「扱っているテーマ」の四つの観点で、それぞれ前期（十三作品）と後期（二十作品）別にまとめた表が登場する。その中でも特に、「登場する題材・小道具」と「扱っているテーマ」の二点の変遷に気を留めながら、後に続く論を読み進めて欲しいと思う。

## 二 前期—大正六年七月～大正八年六月—

（※傍線が主人公を示す。また波線は別の作品にも共通して登場した題材・小道具を示している。）

題名	登場人物	登場する題材・小道具	扱っているテーマ
豌豆の頃 咲く頃	私（お嬢様） お優	浜 <sup>3)</sup> ・ <sup>3)</sup> ん <sup>3)</sup> ど <sup>3)</sup> う <sup>3)</sup> の <sup>3)</sup> 花 <sup>3)</sup> ・ <sup>3)</sup> 浜 <sup>3)</sup> ・ <sup>3)</sup> 松 <sup>3)</sup> 原 <sup>3)</sup> ・ <sup>3)</sup> 花 <sup>3)</sup> 束 <sup>3)</sup> 赤い <sup>3)</sup> き <sup>3)</sup> れ <sup>3)</sup> ・ <sup>3)</sup> ば <sup>3)</sup> れ <sup>3)</sup> ん <sup>3)</sup> ・ <sup>3)</sup> 遠 <sup>3)</sup> い <sup>3)</sup> 町 <sup>3)</sup> ・ <sup>3)</sup> 絵 <sup>3)</sup> 葉 <sup>3)</sup> 書 <sup>3)</sup>	友情 遠くへの旅立ち

縞のあはせ	小さい星	星の窓	お礼の花束	送別会の後	燕の話	初夢のお話	美しい貝がら
私 純ちゃん	私 お友達 英語の先生	百子 おばあさま	環(お嬢様) お仙ちゃん お仙の母親	秋子 牧田さん 小川さん(小川みつ)	私 岡先生	私 文子さん	しのぶ 静ちゃん・幹ちゃん
あはせの着物(縞の着物)・お金 記念日・音楽会・松の樹・涙	学芸会・英語・詩(『輝ける小さな星』) 星・お稽古	窓・星・海・幼い弟 空・星影	松林・すみれの花・浜なでしこの紅い花 女の子・涙・お菓 お金・袴・花束	送別会・むらさき色のお金入れ・指環 手紙・お菓・涙・遠い田舎	燕・石盤・榎・燕の糞 ハンカチ・櫛	お正月・お祝ひの式・初夢・犬・リボン 富士・鷹・なすび	白い蓮の花・鶴や猿・夜市・海岸 美しい貝・北の国・絵葉書
友情 貧乏	学校生活 芸の披露	病気 人の死	病気 貧乏 失くし物 富裕層からの施し	孤独 病気 貧乏 遠くへの旅立ち	学校生活 人の優しさ	夢 学校生活	友情 遠くへの旅立ち

詩 博多人形	題名	登場人物	登場する題材・小道具	扱っているテーマ
つばき姫			雪・海辺・旅 博多・南の町	遠くへの旅立ち 孤独
少女対話 四季の会	〜 浜出の日	道子 信子 富子 久子 豊子 千枝子	青葉・お誕生日・春夏秋冬・四季 桜・紅葉・雪	友情
少女対話 土曜日の晩	私 中川さん	遠足・浜出・海岸・手提袋・お弁当 蜜柑・お菓子・松原・桜貝・男の子 栄螺・赤い洋傘	書齋・勉強・作文・兄さん 松葉・籠・提灯	学校生活 富裕層からの施し
拾った お金入れ	私 のりこさん	台湾・赤い小さいお金入れ お金・交番・孤児院		富裕層からの施し

主人公は「お嬢様」などと呼ばれる富裕層の少女である事が多い。彼女達は友人や兄弟・姉妹に囲まれて、幸せ且つ健やかに暮らしている。更には友人や兄弟・姉妹に囲まれて、幸せ且つ健やかに暮らしている。更にテーマは学校生活・行事に基づいており、「送別会」や「遠足」など身近で日常的なものを扱ったものが中心である。また『星の窓』以外は、人の死など暗めなものをテーマとした作品は見当たらず、心優しい主人公が恵まれない人々に善意を持って接する、富裕層からの施し。

三 後期―大正十一年三月―昭和四年五月―

といった内容のものが多い。これらは非常に分かり易い勧善懲悪で、読者の少女達に道徳的な行いを奨励する様な性質を持っている事が分かる。こうした傾向が少々のプランクを経て、後期にはどういった具合に変わって行くのか。それを順に見て行きたい。

頸飾を たづねて	指環	露の珠	空気草履	暖い家	泉の ほとり	秋の宵
椿姫 花子・クロちゃん 愛ちゃん・百合子・ 和子さん	私 おきぬさん	私(ニノチカ) 姉さん	お祖父さん みち子さん(お嬢様)	お婆さん セミヨンお爺さん ウエーラ(カーチャ)	お小夜 春枝さん	不二子 弘ちゃん
海・船・波・涙・兄さん・絵筆 公園・大理石・わすれな草・薔薇・金の蔓草 青い球の電気・ハンカチ・頸かざり・珠・夜露 南天の鉢・豆人形・土人人形・博多人形	黄色い花 ひろーどの小函・落花生・竹藪・お葉・菊・松葉 浜・指環・松林・船大工小屋・台湾・ルビー	人魚・海 月・銀色の月のひかり・薔薇やよもぎや苺の葉 白い寝衣・窓・淡紅色のばら・夜露・淡黄色のば ら・黒い箱・お陽様・針・糸・珠・頸かざり	飾窓・人形・着物・帽子・赤と桃色の市松模様の空 気草履・星・泪	赤坊・揺籃・教会堂・粉屋・雪・ミルク・お金 マント・桃色の着物・スリーブ・涙・礼拝	海布・松林・松葉・泉・椎の木井戸・涙 浜豌豆の花・うす紫のまゆみの花・こがねの月見草・ 漁村・漁夫・船・朝鮮・うす桃色の河原撫子	音楽会・独唱・お稽古・従弟 歌・オルガン・こぼろぎ・杉垣・口笛・涙
夢 不思議な体験	病気 貧乏 祈り 富裕層からの施し	不思議な体験 求道的な姿勢	人の死 夢 不思議な体験 富裕層からの施し	人の死 病気 貧乏 人恋しさ 人の優しさ	遠くへの旅立ち 人恋しさ 祈り	貧乏 芸の披露 人の優しさ

白百合の花	アベ マリア	孤り描く	赤い スリツパ	肖像画	三人の 落しもの
芳子 伊藤さん 八重子さん	道子 橘さん姉妹 中村さん姉妹	娘(孫娘) お爺さん 先生	リーナ お母さん・ソーニヤ ソーニヤの姉さん	アンナ(アーシヤ) ワルワラをばさん	A子さん B子さん C子さん
病院・油絵・化粧台・博多人形・鏡・あづき色のカーテン・アネモネ・アスパラカス・スキートピーダリヤ・白百合・看護婦・白いカーテン・窓	音楽会・独唱・歌(『君よ知るや南の国』「アベマリア」)・楽譜・花環・リボン・飾電気・袴・蠟燭 涙・毛糸の頸巻き	水車小舎・水車・絵・海老茶色の鏡台 水色の鹿の子・碧いかんざしの珠・雁来紅・涙 スケッチブック・黒い帖面・櫛・子守唄	スリツパ(赤・水色・黒・茶・藤色) 窓・赤ちゃん・揺籃・スーパ・パン 子守唄・針・白いマーガレット・白い糸	手紙・麦畑・果物・お薬・画家・絵・涙・肖像画 お酒・お金・月のひかり・屋根裏の部屋	タッチングのお金入れ・写真・淡紅色の絹糸 煙草・おはぎ・甘栗・海苔巻・お金・凶画の清書 林檎・袴・松林・涙・雲雀
友情 病気 孤独	人恋しさ 求道的な姿勢 人の死 孤独	人恋しさ 求道的な姿勢 人の死	貧乏 病気 人の優しさ 求道的な姿勢	貧乏 人の死 病気 不思議な体験	友情 失くし物

哀しき 桜草	博多人形	指輪	秋二題		さくら貝
私(光ちゃん) 姉さん 英子さん	芳子(松村芳) 森川さんのお姉様	百合子 松下さん	2	1	私(文ちゃん) 姉さん 園ちゃん
			私 カコちゃん (和子)	妹(あいちゃん) 姉さん	
病院・松林・海・子守唄・涙・牛乳・兄さん 画家・さくら草・絵・博多人形(女軍出征・首ふり人形)・歌(「君よ知るや南の国」)・踊り・ミニヨン	カルタ会・鏡台・藤色の編物・編針・絹糸・リボン 博多人形・椿姫・カメラ・アルバム・写真・涙 雀・スタンドのカバア・物語(「即興詩人」)	寮舎・お誕生日・贈物・籠・符号・藤色の帯じめ 窓・桜の落葉・ひろうとの小窓・ルビーの指輪 従姉・こほろぎ・涙	窓・桐の花・影・節穴・麦畑・コスモス・ダリヤ あづき色の洋服・赤いエプロン・千代紙の人形・赤 い南京玉の頸かざり	おくすり・コスモス・お星様・雲・白桔梗・女郎花 萩・ラヂオ・レシーヴァ・歌・薔薇・涙	貝から・赤いセルロイドの函・黒地に金の鳶の入つた蒔絵の函・麻の葉の千代紙で張ったボール紙の箱・薔薇・ピエロ・大理石の函・さくら貝 鏡台・ハンカチ・月光・月見草・ピアノ・白百合 コスモス・レシーヴァ
病氣 孤独 求道的な姿勢	病氣 人の死 人恋しさ	病氣 人の死 人の優しさ	友情 遠くへの旅立ち	病氣 人の死	病氣 祈り 人の優しさ

まず前期と比較して文章の量が飛躍的に増えている。恐らく作者尾崎翠の中で、長いものが書きたいという思いが強まって来たのである。それに伴って物語の内容が複雑且つドラマ性の濃いものへと移行して来ているのが分かる。

前期では裕福な家庭の少女が主人公であったのに対し、後期では母が病気で、幼いながらも必死に労働して生活を支える様な、貧しい家庭の少女が主役である。また、人の死、やそこから生まれたどうしようもない、人恋しさ<sup>6</sup>など、一見少女小説らしくらぬ暗く重いテーマにも積極的に挑んでいる。

更にロシアを舞台とした作品（『暖い家』『露の珠』『肖像画』『赤いスリッパ』）や、幻想的で不思議な体験を織り交ぜて書いた作品（『空気草履』『露の珠』『頸飾をたづねて』『肖像画』）など、徐々に実験的要素の多い物語が増えて来た事も窺える。そしてそれと並行して複雑なドラマのディテールを表現するため、前期と比較して作中に登場する題材・小道具の量が圧倒的に増えた事が分かる。次はこれら題材・小道具について考察してみたい。

#### 四 作中の題材・小道具

尾崎翠の物語中の題材・小道具に対するこだわりは有名であるが、その片鱗はこの頃既に見受けられる事が分かる。前期・後期を通して繰り返し現れる浜、松林、貝がら、薔薇、人形、星、歌、そして涙……。色彩も赤、黒、黄、青、銀、白、桃、あづき色などが繰り返し姿を変えて現れている。その詳しい分析は今後の課題としたいが、ここで注目したいのはその後の代表作品に影響を与えたであろう題材・小道具についてである。

まず翠の一番の代表作『第七官界彷徨』。この作品には詩人を目指す町子や音楽家を目指す三五郎など、芸術に関心が深い人物が沢山登場するが、少女小説に於いても「音楽会」（『縞のあはせ』『秋の宵』『アベマリア』）や「歌」（『秋の宵』『アベマリア』『秋二題』）、或いは「画家」（『肖像画』『哀しき桜草』）や「絵」（『肖像画』『孤り描く』『白百合の花』『哀しき桜草』）といった芸術的要素を持った題材・小道具が多数登場する。また真剣に詩人の勉強をする町子や肥料の研究をする二助を思い起こさせる、<sup>7</sup>求道的な姿勢<sup>7</sup>を貫く主人公が出て来る作品（『露の珠』『赤いスリッパ』『孤り描く』『アベマリア』『哀しき桜草』）もある。加えて『露の珠』や『頸飾をたづねて』の様な夢とも現実ともつかない摩訶不思議な体験を扱った作品からは、日常を超えた非日常の感覚「第七官」へと繋がって行く確かな流れを感じる。

更に「歩行」や「こほろぎ嬢」に登場する「こほろぎ」、或いは「桐の花」などの重要モチーフもこの時期に既に登場している事が確認出来、大変興味深い。

#### 五 おわりに

まだ比較的研究が浅い、尾崎翠の一連の少女小説の題材・小道具とテーマを調査してみたが、テーマの変遷（勧善懲悪・道徳的内容↓複雑な人間関係・不思議な現象/心理へのアプローチ）と共に、題材・小道具の量や内容もまた変化している事が分かり、関心がより一層深まった。今後は前期から後期への移行期に何があったのかを探り、更に一つ一つの題材・小道具の詳細な研究・分析を試みて行きたいと思う。いずれにしても、本筋的な物語の進行とはまた別の次元で、題材・小道具など物語の細部を構成するアイテムにまでこだわった尾崎翠の、作家としての

オリジナリティとユニークさには改めて感心させられる。今後も彼女の作品の持つ魅力と面白さの秘密を追って行きたい。

## 注

- (1) 『定本 尾崎翠全集 上・下巻』(筑摩書房 一九九八年九月・十月)  
〔前期〕大正六年七月〜大正八年六月〕  
1 浜豌豆の咲く頃(第十二巻七号 大正六年七月)  
2 美しい貝がら(第十二巻十二号 大正六年十一月)  
3 初夢のお話(第十三巻一号 大正七年一月)  
4 燕の話(第十三巻四号 大正七年四月)  
5 送別会の後(第十三巻五号 大正七年五月)  
6 お礼の花束(第十三巻七号 大正七年七月)  
7 星の窓(第十三巻九号 大正七年九月)  
8 小さい星(第十三巻十号 大正七年十月)  
9 縞のあはせ(第十三巻十二号 大正七年十二月)  
10 拾ったお金入れ(第十四巻二号 大正八年二月)  
11 土曜の晩(第十四巻四号 大正八年四月)  
12 浜出の日(第十四巻五号 大正八年五月)  
13 四季の会(第十四巻六号 大正八年六月)  
〔後期〕大正十一年三月〜昭和四年五月〕  
14 詩 博多人形(第十七巻三号 大正十一年三月)  
15 秋の宵(第十八巻十号 大正十二年十月)  
16 泉のほとり(第十八巻十一号 大正十二年十一月)  
17 暖い家(第十九巻二号 大正十三年二月)  
18 空気草履(第十九巻五号 大正十三年五月)  
19 露の珠(第十九巻九号 大正十三年九月)  
20 指環(第二十巻三号 大正十四年三月)  
21 頸飾をたづねて(第二十巻四号 大正十四年四月)  
22 三人の落しもの(第二十巻五号 大正十四年五月)  
23 肖像画(第二十巻六号 大正十四年六月)

- 24 銀の燭台(第二十巻七号 大正十四年七月)  
25 赤いスリッパ(第二十巻十号 大正十四年十月)  
26 孤り描く(第二十巻十二号 大正十四年十二月)  
27 アペマリア(第二十一巻三号 大正十五年三月)  
28 白百合の花(第二十一巻七号 大正十五年七月)  
29 さくら貝(第二十一巻十号 大正十五年十月)  
30 秋二題(第二十一巻十一号 大正十五年十一月)  
31 指輪(第二十一巻十二号 大正十五年十二月)  
32 博多人形(第二十二巻二号 昭和二年二月)  
33 哀しき桜草(第二十四巻五号 昭和四年五月)  
※24「銀の燭台」の署名は「南條信子」。33「哀しき桜草」は「尾崎翠」、それ以外はすべて「尾崎みどり」の署名。尚、本文中の引用には全て「定本 尾崎翠全集 下巻」(筑摩書房 一九九八年十月)を使用した。  
(3) 初出は一九三二年二月―三月号『文学党员』(一卷二号―三号、アトラス社刊)で全編の約七分の四を、前・中編として発表。次いで同年六月発行の『新興芸術研究』(二輯、板垣鷹穂編、刀江書院)に全編を発表。  
(4) 例えば『第七官界彷徨』の構図その他(一九三一年六月発行の『新興芸術研究』(二輯)に、「第七官界彷徨」の全編とともに掲載)などにその題材・小道具に懸ける情熱が窺える。  
(5) 初出は『家庭』の昭和六年九月号。翌七年二月『文学クオタリイ』に再録される際、若干の手直しが施された。  
(6) 一九三二年七月号『火の鳥』(六巻七号 栗原潔子編、火の鳥編輯所)に発表。

## 参考文献

- 川崎賢子・加藤典洋 「対談 少女小説の力」(『思想の科学』四八二号 一九九一年十月)
- 尾崎翠 『定本 尾崎翠全集 下巻』(筑摩書房 一九九八年十月)
- 黒澤重里子 「尾崎翠と少女小説」(『定本 尾崎翠全集 下巻』筑摩書房 一九九八年十月)
- 熊谷信子 「尾崎翠―少女小説とメディアアリティ―」(『芸術至上主義文芸』三十号 二〇〇四年十一月)